

二〇一五年度

A

国語 (1)

〔注意〕答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

近所の公園で陸が田町を見かけたのは、夏休みも後半に入
ったある日のことだった。

暑すぎて人気もまばらな園内の、ひとときわひっそりとした
裏口付近にあるベンチの上で、田町はスマホをいじっていた。
どうやらゲームをしているようだ。

うつすら画面の見える距離まで陸が歩みよったところで、
気配を察した田町がふりむいた。

「あ」

田町はうすい眉毛を八の字にして硬直し、きまり悪げに
うつむいた。その「こまったポーズ」は小さいころ、かくれ
んぼで見つかったときと少しも変わっていない。クリーム色
のワンピースをまとった体の細さも昔のままだ。

見なかったふりをしておりすぎよう。陸はとっさにそう
決めた。田町は、きつと、ぼくにそうしてほしいはず。

①なのに、田町の白い帽子が目に入った瞬間、そこから
動けなくなってしまった。

帽子のつばを彩るボタンのような黄色。その一点に視線
がくぎづけになった。

陸は息を殺して田町へ歩みよった。一步一步、ていねいに
足を進めた。そして、硬直したままの田町にむかい、そつと
右手をさしのべた。

「え」

「しっ」

田町がびくんと身をすくめたのと、陸の手が帽子のつばに
ついていて黄色い点を捕らえたのと、ほぼ同時だった。

「見て」

きよんとしている田町の鼻さきで、陸が軽くまるめてい
たこぶしを開く。

と、そこには小さな虫がいた。

「なに？」

「キイロテントウ」

赤くないし、背なかの星もない。けれどこれもテントウム
シの一種なのだと説明する陸の手に、たしかめるように田町
がひたいをよせた。

「うん、黄色い。きれいな色」

「でしょ。きれいなだけじゃなくて、植物の病菌を食べて
くれるから、人間にはありがたい虫なんだよ」

な、と陸がてのひらの虫に呼びかける。

瞬間、それまでじつとしていたそれが羽をばたかせ、す
うっと宙へうきたった。そのまま陸の鼻さきをかすめ、ベン
チのわきにある立木のほうへ舞っていく。天頂からするどく
照りつける太陽の、何億分の一かを凝縮させたような黄色
い点は、またたくまに木の葉の緑へ吸収された。

バイバイ、達者でな。

心でつぶやく陸の耳に、田町の声がした。

「りっくん、いまでも虫が好きなんだ」

田町の表情はさつきよりもずっとやわらかい。
うれしさがこみあげて、陸は笑った。

「いまでも好きだよ」

「昆虫博士、だったよね」

「うん。でも、べつに博士じゃないけど」

「……中学生だもんね」

五秒ほど考えてから田町が返したとき、陸にはそれがどう
いう意味かわからなかったものの、そうだな、もう中学生
だもんね、とわからないなりに思った。

まだ小学校の低学年だったころ、陸は田町ときどき外で
遊んでいた。近所の仲よしチームで集まるときには、たいて
い、田町もそこにいた。地味でおとなしい女の子だったから、
記憶のなかの影はどれも淡い。一度、だれかの家で上手にピ
アノをひいていた姿だけが記憶に焼きついていて。四年生に
なると仲よしチームの男子と女子が分裂し、クラスもちがう
陸と田町には接点がなくなった。中一の新学級に田町がいる
のを見たときも、陸はとくになんとも思わなかった。

でも、田町はおぼえていたのだ。りっくんという呼び名も、
陸が虫好きであることも。

「この公園、よく来るの？」

「うん。たまに」

「ぼくはほとんど毎日来てるよ。虫の観察に」

「観察？」

「夏休みの自由研究。この公園、昆虫の宝庫って言われてる
んだよ。去年なんか、ぼく、コクワガタを見つけたし」

「コクワガタ？」

「このへんじやめつたに見ないんだ」

「ふうん。それ、なあに？」

陸が手にしたレジ袋を田町が指さした。

「あ、これ、セミのぬけがら。今日は三つ見つけたところ」
全長三センチくらいのアブラゼミのぬけがら。麦茶色に透
きとおった背なかをまるめ、ファイティングポーズのように
顔の前で両手をかまえている。まるで、そこにあった命をい
までも守ろうとしているみたいに。

「こんなに近くで見たの、はじめて」

田町は気味悪がりもせずぬけがらのひとつを手にとり、
しげしげとながめた。

「なんか、すごく……形が、よくできてるっていうか」

「そうそう、そうなんだよ。うちのお父さんは芸術作品だっ
て言ってる」

陸はますますうれしくなった。

「ぬけがらだったらまだいいっぱい、あつちのほうにいく
らでもあるよ。おいでよ、見せてあげるから」

勇み足で歩きだし、五歩くらい行ったところで、ふつとわ
れに返った。おいでよ、と言われて田町がついてくるだろう
か。もう小学生でもないのに。

そろりと後ろをふりむいた陸は、スマホを肩がけのポシェ
ットにおさめながらついてくる田町の姿に、ほっとした。

敷地内にプールやテニスコートをもつその公園の、東のは
てには小さな雑木林がある。地面の土が古墳のようにもりあ
がっているそこを、陸は「丘」と呼んでいた。

多種の草木がからまりあうように生い茂っている丘。重なり
あった梢が天然の日傘となつて、ほかの場所よりも心もち
涼しく、うす暗い。なにがあるでもないで人間がよりつ
かないそこは、昆虫たちの楽園だった。

その丘へ分け入る前、陸は両手首にはめていた虫よけリン
グの片方はずし、田町に「はい」とさしだした。

「これ、しといったほうがいいよ。ヤブ蚊が多いから」

[注意] 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

すっぱいくだものみたいなおいのするリングに田町が手をとすと、まるでおそろいのプレスレットでもしているみたいで、くすぐったい。

木深い丘へ田町を先導した陸は、にわかに生き生きとして、おしゃべりになった。

「昆虫のことってさ、みんなあんまり知らないけど、でも、すごいんだよ、昆虫って。知れば知るほど、すごいんだ。ななあって、地球上の動物ぜんぶのなかで一番種類が多くて、一番繁殖したのが昆虫なんだから」

「繁殖の理由はいろいろだけど、まずはやっぱり、棲みわけかなあ。昆虫って、みんながちゃんと、なわばりをとりあわないように、ちよつとずつちがう場所と共存してるんだ。一本の木だって、幹と、葉っぱと、落ち葉のなかと、それぞれべつの虫が棲んでるし。あと、食べものも虫によってちがうから、エサもとりのあわないですむ。人類よりずっとかしこいって、お父さんが言ってるよ」

「体が小さいのも、繁殖した理由のひとつなんだって。体が小さいと、少しの食べものでも成長できるし、生きていけるでしょ。そのぶん滅びる確率が低くなるってこと。たとえば車でも、大きな車はたくさんエネルギーを使うから、すぐにガソリンがなくなっちゃう。おなじガソリンの量だったら、だんぜん、小さい車のほうが遠くまで走れるんだ」

田町とともにヤブをかきわけ、木の幹や枝にくっついたセミのぬけがらを探しまわりながら、陸はおおいに昆虫のよさを語った。②まるで自分の王国にひさびさの客人をむかえた王さまみたいに、揚々と。

実際、だれかに昆虫の話をするのはひさしぶりだった。小学校まで昆虫仲間だったともだちは、べつの中学へ通いはじめたとたん、陸にも虫にも興味をなくしてしまった。いまのクラスで仲がいいノムさんは歴史オタクで、学校からの帰り道でも、虫よりも地蔵やほこらに熱い視線をそそいでいる。一度、クラスで一番ひまそうなイタルを丘へ誘ったら、イタルは陸の目の前でバッタの足を引きちぎった。即刻、丘から追放した。

③その点、田町には見こみがあつた。どんな虫もかわがらないし、乱暴もしない。ぬけがらがさがしの勘もい。

「あ、またあつた。でもこれ、ちよつと色がちがう」

「あ、それはミンミンゼミのぬけがら」

「すごい。わかるんだ」

「ちよつと黄色っぽいんだよね」

「あ、そこ、変わった虫がいる」

「それはキボシカミキリ」

「キボシ？」

「黄色い星」

「ほんとだ、模様が黄色い」

くさむらや木かげで新たな昆虫を見つけるたびに、陸は短パンのポケットからメモ帳をとりだし、虫の名前を書きとめた。

「りつくん、虫、つかまえないの？」

「うん。前はつかまえてたけど、いまは観察だけ。つかまえると、すぐに死んじゃうし。たとえば、このキボシカミキリなんかさ、死んだとたんに、この黄色い模様が消えて、白くなっちゃうんだ。標本にしたって、そんなのはもう、キボシカミキリじゃないからね」

田町が真剣に聞きいつているので、陸はなんだかむずむずした。クラスメイトの女子に感心されている自分がほろしいような、てれくさいような。

「だから、集めるのはぬけがらだけにしようぜ」

急に態度がお兄さんっぽくなる。

妹のように思えるのは、田町が小柄なせいでもあった。一年A組の男子のなかでイタルのつぎに背が低い陸よりも、田町はさらに背が低い。

「でもりつくん、こんなにぬけがらばかり集めて、どうするの」

「どうもしないよ。とつとくだけ。お母さんに見つかって捨てられるまで」

「えー」

「去年、ランドセルのなかにぬけがらいっぱいいたためこんでたら、お母さんが見つけて、卒倒しかけてた」

七秒くらいはかんとしてから、田町が体をおりまげた。白い帽子の下、汗にぬれた顔をくしゃくしゃにし、体をよじらすようにして笑いだす。

田町が笑っている。こんなに愉快そうに。こんなに自由な感じで。

④めつたにいない虫を発見したみたいな、駆けまわりたいような満足感が陸の胸をいっぱいにする。けれど、ながめているうちにそれはみるみるしぼんで、逆に悲しくなってきた。

「田町」

言っちゃいけない。言わないほうがいい。

頭ではわかっていた。

「なんで学校に来ないの？」

「ああ、やっぱり。言つてすぐに後悔した。」

一瞬にして、田町の笑いが消えた。子リスみたいにおどおどした目が、行き場をなくして緑の丘をさまよう。力をなくしたそのまなざしは、もうさつきまでの田町ではなく、一年A組のかたすみでいた無口な女の子のものだった。

……

……

……

……

……

声をなくしたふたりの頭上から、小雨のように、セミの鳴き声が降りそそぐ。

降りそそいでも、降りそそいでも、もはやさつきまでの丘にはもどれなかった。

のどがかわいたと田町が言つて、ふたりは丘をあとにした。

プールのそばにある自動販売機で、田町は冷たいレモネードを買い、陸にもコーラをおごつてくれた。

きんきんに冷えたペットボトルのふたをまわすと、プシュツと小さな音がして、涼やかな香りがほとばしる。のどをすりぬける炭酸の刺激が気持ちいい。

ベンチの上でコーラをごくごく流しこむ陸の横で、田町はあまそうなレモネードをちびちびやつていた。のどなんてかわいてなかったんだろうな、と陸は横目でうかがいながら思う。陸と同様、気まずい沈黙から逃げたかっただけだろう。

——なんで学校に来ないの？

あのひとことをきっかけに、ふたりのあいだからは会話が消えた。⑤田町は標本の虫みたいになつてしまった。⑥悪い

[注意] 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

ことを言ってしまったと最初は思った陸も、時間がたつほどに、だんだん、なにが悪いのかわからなくなってきた。

何年かぶりに田町としゃべって、いっしょにぬげがらがしをして、いろんな昆虫を見つけて、楽しくて、田町は大声で笑って、なのに、あのことを聞かずに別れるなんて、そっちのほうがへんなんじゃないか？

太陽はとうに天頂のピークをすぎて、西へとかたむきだしている。ベンチの前を歩き交う人々の多くは髪をぬらして、プール帰りであるのがひと目でわかる。陸は昆虫観察で日焼けした自分と彼らの肌を見くらべて、負けるなあ、と思った。木立に守られた丘と、むきだしでプールとは、やっぱり夏の威力がちがう。

「あ」

となりの田町から意識をそらすように、前をとる人々を観察していた陸は、突如、両目を見開いた。見おぼえのある顔がある。

おなじクラスの吉田くん。髪がぬれ、肌も焼けて雰囲気が変わっているから、すぐにはわからなかった。が、あのとぼけた顔はたしかに吉田くん。

「ね、あれ」

田町も見ただろうか。いきおいこんでふりむいた陸は、こくりと息をのみこんだ。

田町は吉田くんを見ていなかった。陸のことさえ見ていなかった。ただ両手で包んだ黄色いペットボトルだけを、いまにも涙がこぼれそうな目で見つめていた。

「田町？」

「あたし……あたし、うまく言えないんだけど」

「うん？」

「うまく言えないけど、なんか、居場所が、ない気がして」

「居場所？」

「あの教室。あたしの場所だけ、ない気がして」

「なんで」

「うまく言えないけど」

⑦もどかしそうに田町がペットボトルのふたを開け、またすぐに閉める。

「うちのクラス、女子、十二人だけでしょ。なんか、少なすぎて、その、隠れるところがないっていうか」

「隠れる？」

「原小のころは、どのクラスにもいたの。あたしみたいな子が、ほかにもいた。だから、かたまって、隠れてられた。でも、いまは……」

⑧せわしなくふたを開閉する田町の手首で、虫よけリングがぶらぶらとゆれる。田町の言う意味が陸にはわからなかった。

「だれかにいじめられてるの？」

「そうじゃない。いつかは、はじまるかもしれないけど」

「なんで」

「あたし、のろいし、小さいし。A組の女子、みんな背が高いんだ。平均身長、小六のときとぜんぜんちがう」

「ぼくだって低いよ」

「でも、りっくんにはイタルがいる。自分より下がいるでしょ」

「そんなに変わんないけど……っていうか、背が低いこと、そんなに気にすることないよ」

ここぞとばかりに陸は力説した。

「動物界では、むしろ、小さいほうがいいんだから。さっきも言ったけど、昆虫が動物のなかで一番繁栄したのは、小さいからでもあるんだよ。体が小さいほうが少ない食べもので生きてけるでしょ。それって、すごく有利な条件なんだよ」めずらしく、田町の反応は速かった。

「⑨でもあたし、虫じゃないし」

みもふたもない応答に、陸は声をつまらせた。

でもあたし、虫じゃないし。

言われてみれば、そのとおりだ。田町は虫じゃない。田町が生きのびなきやならないのは森でも丘でもなくて、一年A組の教室だ。

そう、田町がぼくに言っただけでほしいのは、昆虫のたとえ話なんかじゃない。

たぶん、もつとまっすぐで、もつと強い言葉。

わかつているのに、出てこなかった。一気に飲みほした炭酸で麻痺したみたいに、舌がこわばって、動かない。

思えば、田町の心配をしている陸自身、丘をはなれた学校ではおとなしくてめだたない男子なのだった。ものかげにひっそりと棲息する種族。騒がしい男子たちにはいばられても、文句も言えずに笑っている。どうやら人間界にも弱肉強食がありそうだと、最近、やつとわかってきた。

こんなぼくにないが言える？

くらくらするほど青い空の下、考えるほどに自信をなくしていく。

だまりこむ陸のとなりで、田町もやはりだまりこみ、ふたたび標本と化したつある。いけない、と陸はあせる。なにか言わきゃ。虫のこと以外のなにか。田町がせつかく気持ちを打ちあけてくれたんだから。

「田町」

なにを言えいいかわからないまま陸が口を開いた、そのときだった。

陸の視界をひらりと茶色い舞いがかすめた。

その軽やかなシルエットに、陸は瞳を吸いよせられた。

一瞬にしてとりこになつていった。

⑩もしかしで。いや、まさか。でも……

心臓がどくどくと脈打つ。駆けだしたいのをこらえてそっと立ち、足音をしのばせて蝶を追う。絶えずひらひらしている羽の模様はなかなか見てとれない。

陸をもてあそぶように風とたわむれたあと、蝶はようやく自動販売機のわきにある花だんに羽を休めた。スイートピーの花びらと、さほど大きな変わらない羽が重なる。

いまだ！

陸は呼吸を止めて至近距離まで目をよせた。その羽をたてにつらぬく白いラインに注目し、それから、へなりと脱力した。

ヒメジャノメだ。

コジャノメじゃなかった。

がくつと地面にしゃがみこみ、頭をひざにおしつける。今度こそはと思ったのに。観察記録にはじめて「コジャノメを発見」と書けるかもしれないのに。

何度も息を吐きだし、ようやく息をとりなおした陸が立ちあがったとき、もはや花だんにヒメジャノメはいなかった。消えていたのは蝶だけではない。さっきまでいたベンチを

二〇一五年度

A

国語 (4)

[注意] 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

ふりかえった陸は、⑪自分がとりかえしのつかないへまをしたことをさとした。

田町の姿が消えていた。

ベンチの上に残っているのは、セミのぬけがらと、⑫レモネードのぬけがらだけ。

「田町！」

陸がうわずった声をあげた。たよりないその音が太陽の熱におしつぶされるように消えると、つぎの聲は、もう出なかった。

陸は自分もぬけがらになったような思いで、さげふことも、動くこともできずに立ちつくした。

(『クラスメイツ』森絵都)

問1 傍線①「なのに、田町の白い帽子が目に入った瞬間、そこから動けなくなってしまった」とあるが、これはなぜか、理由を説明しなさい。

問2 傍線②「まるで自分の王国にひさびさの客人をむかえた王さまみたいに、揚々と」とあるが、「王国」「王さま」のたとえに注意して、この時の陸の気持ちを説明しなさい。

問3 傍線③「その点、田町には見こみがあつた」とあるが、ここではどういうことか、説明しなさい。

問4 傍線④「めったにいない虫を発見したみたいなの、駆けまわりたいような満足感が陸の胸をいっぱいにする。けれど、ながめているうちにそれはみるみるしぼんで、逆に悲しくなってきた」とあるが、

(1)なぜ陸は満足感を持ったのか、(2)なぜ急に悲しくなったのか、それぞれ説明しなさい。

問5 傍線⑤「田町は標本の虫みたいになつてしまった」とあるが、なぜ、陸は田町の変化をこのように感じたのか、説明しなさい。

問6 傍線⑥「悪いことを言ってしまったと最初は思った陸も、時間がたつほどに、だんだん、なにが悪いのかわからなくなってきた」とあるが、なぜ陸はそう思ったのか、説明しなさい。

問7 傍線⑦「もどかしそうに田町がペットボトルのふたを開け、またすぐに閉める」とあるが、この動作からどんなことがわかるか、説明しなさい。

問8 傍線⑧「せわしくなくふたを開閉する田町の手首で、虫よけリングがぶらぶらとゆれる」とある。「虫よけリング」は前に「まるでおそろいのプレスレットでもしているみたいで、くすぐたい」とあつたが、それと結びつけて「虫よけリング」がゆれる様子からどのようなことがわかるか、説明しなさい。

問9 傍線⑨「でもあたし、虫じゃないし」とあるが、この時の田町の気持ちを説明しなさい。

問10 傍線⑩「もしかして。いや、まさか。でも……」とあるが、この時の陸の気持ちを説明しなさい。

問11 傍線⑪「自分が取り返しのつかないへまをしたことをさとした」とあるが、具体的にどういうことか、説明しなさい。

問12 傍線⑫「レモネードのぬけがら」とあるが、

(1)「レモネード」の色は、この作品全体の中でどんな役割をはたしているか、説明しなさい。
(2)なぜ「ぬけがら」と言うのか、説明しなさい。

㊦ 次の傍線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

①台風でカセンがあふれる。

②シュノウ会談が開かれる。

③作文をヒヒョウし合う

⑤飛行機をソウジュウする。

⑥シャオン会に出席する。

⑦リッキョウを渡る。

⑧電車賃をセイサンする。

⑨ショウヨウ樹林が広がる。

⑩シユクジをのべる。

⑪セイジツなひとがら。

⑫シツソな生活をする。

⑬コウブツ資源にとばしい。

⑭ここがシアンの上どころだ。

⑮これまでのケイロを確かめる。

⑯海にしずむ落陽。

⑰額をつきあわせる。

⑱紙を束ねる。

⑲引導をわたす。

⑳衆目の見るところ。

--	--

問 12		問 11	問 10	問 9	問 8	問 7	問 6	問 5	問 4		問 3	問 2	問 1
(2)	(1)								(2)	(1)			

①	⑤	⑨	⑬	⑰
②	⑥	⑩	⑭	⑱
				ねる
③	⑦	⑪	⑮	⑲
④	⑧	⑫	⑯	⑳